

## 明らかにされた政府「媚中」の実態

# 中学校地図帳問題で 中津川博郷議員が国会質問

本誌編集部



質問する中津川博郷議員（5月19日）

中国の要求圧力を受けて記述を書き換える「教科書問題」は歴史教科書だけの問題ではない。地理教科書（地図帳）にも関わっているのである。ところが一般国民がほとんどこれを問題にしないのは、「知らないから」。それほど中国の宣伝が国民の心にまで入り込んでいるのだ。

たとえば中学校用である帝国書院の『新編中学校社会科地図』と東京書籍の『新しい社会科地図』はともに、①「東アジア地図」で中国と台湾との間に国境線を引かず、「中華人民共和国」と国名表記されたエリアに台湾を組み込み、②中国の資料地図に台湾も中国の領土として記載し、③各国統計一覧のなかで中国の面積数値に台湾の

面積を含めるなどしている。これは明らかに教科書会社の記述ミスであり、文科省の検定ミスであるが、両者とも修正する意思はない。つまり「一つの中国」という中国の台湾侵略正当化のための宣伝にあえて従っているのだ。

そこで○五年十月、笠浩史衆院議員（民主党）が政府への質問主意書で、この問題を取り上げたところ、当時の小泉純一郎首相の回答は、断じて記述の誤りを認めるものではなかった。それほど中国の前では物が言えないのだ。

かくてこの異常事態を打開しようとして立ち上がったのが中津川博郷衆院議員（同）だ。五月十九日午前の衆院外交委員会会で質疑に立ち、「笠先生が出した質問主意書のとおり、教科書は台湾を中

国領と表記している。ご存じか」と質問すると、「認識している」と中川正春文科副大臣。そこで中津川氏は「それなら誤りをすぐに糾せ」と言わねばかりに「日本政府は台湾を中国の領土と承認していない」と強調した。

そしてその上で、「教科書の地図を見ると、政府は台湾を中国の領土と見ているとの印象を与える。小中学生が見たら、台湾は中国のものだと思ってしまう」との堂々たる正論を展開した。真理をついたこの発言にはもはや誰も反論できないはずなのだ、それを教えてするのが日本政府の実態なのだ。武正公一外務副大臣はこう答えた。「台湾の何らかの地位を認定する立場がない」

（それら教科書は）検定基準に照らし、教科用図書検定調査審議会の審議により、教科用図書として適切であると判断されたものだ」

このように述べ、「外務省として答える立場がない」と答えたのだが、教

科書の表記内容の是非に敢えて触れないところは小泉答弁書と同様だった。

だが政府は「台湾の地位を認定できない」としながら、検定でははっきりと中国領土と「認定」しているのである。

だから中津川氏は納得しなかった。なおも「誤解を与える」直すよう指導を」と訴えると、今度は中川氏が文科省としての説明を次のように行った。「国家としての整合性を持たせ、検定基準を作っている」

「外国の国名(あるいは領土)については検定基準により、原則として外務省編集協力の『世界の国一覽表』によって表記されている。台湾については『世界の国一覽表』で『その他の主な地域』に分類され、『中華人民共和国政府は、台湾が中華人民共和国の領土の不可分の一部であるとの立場を表明しており、日本国政府は、その立場を十分理解し尊重することを明らかにしている』との解説が付されている。教

科書の発行者は、それを踏まえて編集しており、適正であると判断された」

これもまたおかしな話である。「世界の国一覽表」(薄っぺらな市販の小冊子だが)のどこに台湾が中国領と書いてあるのか。あるいは中国領とする中国の立場を、日本国政府は承認したとあるのか。

このような矛盾に満ちた回答もまた、小泉答弁書と同じだったのである。まさに政府の厚い「媚中の壁」に染まるのだ。しかしだからこそ、中津川氏は熱弁を続けた。

「台湾派も中国派もない。中国は大事だが台湾も大事なのだ。文科省も外務省もしっかり取り組んでほしい」

「台湾は地域と呼ばれるが、主権国家であることは間違いない。選挙も行われている。中国に選挙はあるか」  
「歴史問題について」韓国や中国は日本の悪口ばかり言うが、台湾は評価している」

「台湾の人たちは日本人より日本的。素晴らしい人たちだ。しかしその人たちが、いつ中国に取られるかと、危機感をもって暮らしている」

「台湾は日本の安全保障上、最も大事なところ。もっと大切にしなければだめだ。国会でも台湾をしっかりと理解して行こう」

「台湾のあらゆる面の重要性を理解し、行政をやっていたいただきたい」

どれももつともな訴えである。こうした正義の言論を受け、政府側も少し心が動いたようだ。武正氏は「安保上大事だと言う視点、思いはしっかり承った」と答えた。中川氏は「難しい外交バランスの中で政府のスタンスだが、個人的、心情的には一にするところが多い」と述べた。

「それならば、教科書を何とかしろ」と、国民としては言いたくなるが、とにかく、地理教科書は正運動を進める我々にとって中津川氏のような、信念と勇気を持った政治家の存在は尊い。